



バックナンバーは  
ホームページで。

## 『二十四の瞳』と『二十四の瞳』

齊藤 卓 木下恵介記念館館長

記念館に来館された方と木下恵介作品について話していると、「おや？なんか変だぞ」と思うことがある。ある映画について話しているのだが、話題の細部が噛み合っていないことがある。

客「あのお婆さん役、不気味でしたね」

私「そうですか？かわいいお婆さんじゃなかったですか」

客「あの女優、坂本スミ子だったよね…」

ここでは『楢山節考』(1958年)が話題であったのだが、会話の相手は木下恵介作品と今村昌平版(1983年)を混同されているのである。

こんな会話をすることもあった。

私「導入部でモトーンのなかに小豆島の魅力がさらっと、そしてしっかり描かれていますよね。あの映像があるからその後の物語がすごく分かりやすくなっていますね」

客「えっカラーだったでしょう？」

勿論『二十四の瞳』(1954年)について話していたのだ。どうもその方は、いつか観たTVドラマの『二十四の瞳』と木下恵介が見事に重なってみえているのだということがその後でわかった。どちらも『二十四の瞳』だから、お話しはそんなに大きく違っていませんよ、というような見方をされていた。

『二十四の瞳』は1987年、田中裕子主演で朝間義隆監督が劇場用映画としてリメイクした。テレビでは1964年に当時の東京12チャンネルでドラマ化(香川京子主演)されたのが最初で、以降67年、74年、76年、79年、05年とドラマ化は全部で6回を数える。また80年にはフジテレビ系列でアニメーションになった『二十四の瞳』が放送された。そして現在までに、木下恵介監督『二十四の瞳』は地上波で、衛星放送で度々放送されてきた。

これは、木下恵介が『二十四の瞳』を発表してから、現在までの約60年間『二十四の瞳』という映像作品は世代を越えて、新作を含めて観る機会があったということである。

このあたりから、どうも『二十四の瞳』という題名だけが、ひとり歩きをはじめしてしまうのだ。ただ、様々な製作意図によってつくられた『二十四の瞳』ではあるが、まわりまわってそれは木下恵介という名前のところに辿り着き、どうした訳か木下恵介に重なってしまうのも事実のように思えてくる。

ここで不思議なことが起こってくる。木下恵介監督『二十

四の瞳』を観ていなくても、どうしたわけか『二十四の瞳』を観たような気がする人たちが、結構いらっしゃるという事だ。この筆者もそのひとりであったかもしれない。1960年代の義務教育期間に、学校の授業で『二十四の瞳』を鑑賞する機会があった。確かにあった。体育館の床に座って、前の友だちの背中を押したり、背中から押されたりしながら2時間40分の映画を観ていたのだ。それをもって『二十四の瞳』を観たとは絶対に言い難いはずなのに、筆者を含め多くの人たちは、観たから観たと言ってしまい、観たことになってしまうのだ。中には途中で席を立ってしまっても半分くらいは観たので、観たという人もいる。

テレビドラマを観た方にも同様のことが起こってきたのではないだろうか。確かに『二十四の瞳』を観たことには変わりがない。

正確に書けば、しっかりと木下恵介監督『二十四の瞳』は観ていないのだが、学校での映画上映会やそのリメイク版上映に立ち会ったとか、テレビドラマで何度か目にすることがあるということになるのではないかな。

木下恵介監督『二十四の瞳』は一人でも多くの人に観てもらいたい映画である。

この映画には、ある時代をごく普通に生きている大石久子という女性の半生を軸に、子どもや大人、女や男、日常と非日常の社会が美しい風景と唱歌を背景に描かれている。製作から60年たった今でもこの映画の普遍性はまったく色褪せていない。

私たち一人一人には固有の人生がある。木下恵介はそれを理解していた。大石久子という人物は映画を観る一人一人の実像でもある。木下恵介監督『二十四の瞳』をこれまで言われてきた既成概念の中だけで捉えようと、大きな見落としがあることにそろそろ気付いても良い時代かもしれない。

先日開催した『二十四の瞳』の上映会では、映画の終演と同時に大きな拍手が湧き起った。

「監督、聞こえていますか。嬉しいですよ」と、どこかで観てくれる木下恵介に呟いた。

